

Title	考古學上の夢見ヶ崎
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.136- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白錄
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

考古學上の夢見ヶ崎

一昨年三田史學會が調査した例の日吉加瀬山白山古墳から鐵道局の官舎を隔てゝ東方に高臺をなしてゐる丘陵約九萬坪の地は夢見ヶ崎と稱せられ、太田道灌の遺蹟と傳へられてゐる。我等に關心のもたれるこの丘上の考古學的遺蹟は既に幾度か調査せられたやうで、地元の考古家高橋清作氏の近著からその點を左に抜萃して見よう。

△この夢見ヶ崎に、所謂考古學的資料が、非常に澤山埋藏せられてゐるといふ噂の流布されたのは、たしか明治三十年頃であつた。ところが當時一人の米國人が訪ねて來て種々調査の上で、貝殻の多くある場所を選んで、六尺四方の面積に深さ十尺ばかりの所を發掘したのであつた。然るに地下尺餘にして土を交へぬ貝殻ばかりが驚くほど夥しく埋まつてゐるのに突き當つた。この米國人は日本語を達業に話したのでよく説明してくれたが、何でもこれは非常に研究の價値あるもので、今よりおよそ四千年位も前の時代のものであらうと思ふといふことであつた。そして發掘した現場などを撮影して引揚げて行つた。

△明治三十五年頃横濱から此の貝殻を買ひに來たものがあつた。日々人夫が三十五六名づつ、掘出しては鶴見川へ搬び出して横濱へ持つて行くのであつた。元來右の貝塚は地積にして約三百坪、厚さ一丈餘もあつたが、其の間から所謂人骨、獸骨、土器など混交して出土した。

△明治四十年の晩春、時の帝國大學教授坪井正五郎博士が助手の柴田常惠氏とともにこゝを見られ、夢見ヶ崎の東南端を人夫十五名を使つて發掘されたことがあつた。その結果は六七個の横穴も發見され、丘陵の上にある塚も二ヶ所掘つて見ると、そこには石棺のやうなものがあつた。坪井氏は之を見て何時の世か物ずきな者があつてどうも少し手を入れたらしいと語られた。尙此時の出土品は大抵大學へ持ち歸られた筈である。

△明治四十三年に、了源寺境内の瓢箪形の小塚から偶然にも古鏡が夫小二面、直刀一振が發掘された。これは帝室博物館に納められた。

△大正元年には東京電氣會社が所有六千坪の夢見ヶ崎の一角を建築用地として埋立の作業をすると、又もや横穴、竪穴が三十八箇所も發見された。勿論これと同時に夥しい石器土器も出土した。惜いことはこれらの出土品は心ない土工たちの手で破壊放棄された。ある目撃者の話では完全な埴輪などもあつたといふ。

△大正九年には丘陵上の熊野神社境内の淺間塚といふ塚から、古鏡大小二面、土器大小二個を發見して何れも帝室博物館に寄贈した。時の館長森林太郎氏の受領證が現に残つて居る。と。(高橋東舟著夢見ヶ崎二〇一二四頁)